

●春日部市民文化講座（第 30 回） 「高山右近が遺した茶の湯の賜物」

◆日時：2019 年 5 月 29 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■「賜物」について

今日の講演のテーマには、皆さんに馴染みのない「賜物(たまもの)」という言葉を使っています。ある意味ではキリスト教用語なのですが、世間ではこの「賜物」をニュアンスの異なる「カリスマ」と置き換えて使っていますね。でも、聖書的な理解では神様の大きな恵みがぼくたちの小さな心に届いて、それをぼくたちが信仰によって受け止めてぼくたちの力とした時に神様の大きな恵みが「賜物」となるのです。これを原語で説いていくと簡単なのです。聖書の中で「恵み」を「カリス」という言葉で呼んでいます。その「カリス＝恵み」を人々が神様を信ずる心で受け止めた時に「カリスマ＝賜物」になるのです。こういう言い方が分かり易いのではないのでしょうか。

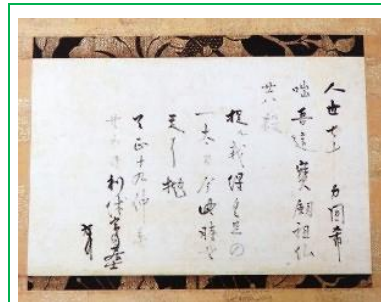
■信じ続ける修道

今日のテーマの「賜物」というのは、信仰に生きた高山右近が信じていることをどのように侘茶の中で表現したのかということなのです。ぼくはこれまでの生涯をかけて、そのことを探求し続けているのです。今朝も自分のために一杯のお茶を点てて、心を静めて探求してきました。高山右近は、大名の地位も何もかも捨てて、加賀の国で「南坊」と称して 26 年間の理想的な生活を送っていたのです。彼の人生の中では一番楽しかった時を過ごしたのだと思います。「南坊」というのは、南蛮坊主で宣教師のことを言いますね。彼は「宣教師のようにぼくは生きたいんだよ」と常々言っていましたし、加賀には教会を 3 つ造ったと言われています。宣教師を呼んでは伝道し、彼はお茶を点てて伝道していたのです。彼は加賀藩・前田家を潤すブレインだったのですよ。そして、高山右近を慕って付いてきた内藤如安もいたのです。内藤如安は、小西行長に仕えた後、浪人して高山右近と一緒に加賀に来て、最後はキリシタン追放令でマニラに赴くのですが、彼と彼の家族は一級の言語学者ですよ。そういう人たちが、秀吉のバテレン追放令で城や領地を失いましたが、前田利家の力で加賀に逃れて客将として厚遇されたのです。でも、最後は徳川幕府により追放され国外退去となるのです。

■千利休の遺偈

千利休は「赤茶碗」と「黒茶碗」のどちらを先に長次郎に造らせたと皆さんは思いますか。そう「赤茶碗」が先でした。千利休は、日比屋了慶の家で宣教師たちから「アダム」という言葉をおそらく聞かされていたと思います。聖書のエデンの園に出てくるアダムですが、赤い土塊(つちくれ)という意味なのです。人間は赤い土塊でできているから死ぬと土に戻っていくのです。人間は赤い土塊からできたから、こういう茶碗に馴染む気持ちがあるのですね。それが「温もり」なのです。茶の湯がどうしてぼくの心を惹くかというと、お茶を一服出されて、まずは手に伝わってくる優しさ、温もり、生きている証、千利休やその弟子たちは、そうした「命の世界」を愛したのですよ。だから、千利休は自分の最後を悟った時に、百回の茶会を開催して、たくさん持っていた道具の中から同じものを出して伝えようとしたのです。そうしたことを踏まえて「千利休の遺偈」を丁寧に読んでいきましょう。

「人生70年。り・い・き・とつ(忽然と大悟したときに発する気合いの声でえい、えい、えい！です)／この宝剣で、祖仏も我も、共に断ち切ろうぞ。(まさに活殺自在の心境なり)／我はみずから得具足(自由自在に使える武具)の一太刀を引さげて／今まさに、我が身を天に抛つ(なげうつ)のだ。(いまや迷いもない心境だ)」



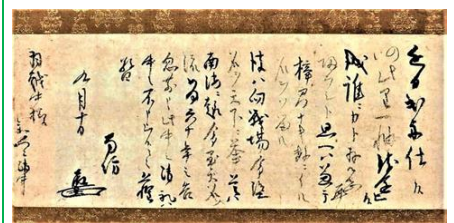
千利休の遺偈

と言っているのです。小松茂美先生は「“天に抛つ”という言葉は“天に任せる”と意味があるんだ」と仰ってくださいました。だから、秀吉から「お前なんか死んじまえ」と言われた時に、ほかの人たちは「謝っちゃおうよ」とか「もっと抵抗しようよ」とか言ういろいろな人がいたのです。でも利休さんは一切を排除して「力圀希咄(りいきとつ)」、この心境だったのです。この命が死を迎えるという「カリス＝神からの恵み」を「カリスマ＝神様からの賜物」として受け止めるだけの心の修道・覚悟を、今あなたはお持ちですか？ ぼくたちが「侘び茶」を学ぶ者、学ぼうとする者として「侘び茶」の創生者の千利休はこうした言葉を遺していったのです。ただの数寄者ではなかったのです。

■千利休と高山右近に通じるもの

高山右近の「日本訣別の書状」は時代も違いますし、内容も違うのですが、千利休の遺偈と精神では一緒です。「帰らじと かねて思へば 梓弓 なき数に入る名をとどむる」という和歌は楠正成(まさしげ)の子・正行(まさつら)が南北朝時代の 1348 年にとうてい勝ち目のない足利の大軍を四条畷(しじょうなわて・現大阪府)に迎え撃つための出陣で、吉野の如意輪寺の扉に矢尻で刻んだ辞世の和歌です。意味は「とうてい勝ち目のない戦いなので、勝つ

て帰れないと思うが、自分が生きていた証に、名をここに刻み、必死の覚悟で出陣をしよう」というものです。楠正行は戦場に向かい命を落として名を天下に挙げ、私は南海に赴き命を天に懸けて名を残す。「如何に」なのですね。この書状にある「命を天に懸ける」という心境と、利休さんの「我が身を天に抛つ」（一切切を天に任せる）という「侘び茶」の師弟は、命を失うことの中で同じ心境を言っているのですよ。これは偶然の一致ではないと思います。まさに断捨離、捨てるものなのですね。



高山右近「日本訣別の書状」

■仏教哲学とキリストの心

ぼくは大徳寺で仏教哲学を学びましたが、仏教哲学というのは哲学であって仏を介在させていますが、人間を中心とした考えなのです。それに対して、キリストの心というのはキリストが十字架に架けられた「贖い（あがない）」があつて、罪の贖いの思想があるのです。仏教哲学も修道は必要です。座禅もその形の一つです。それでも、仏教哲学とキリストの心の違いは、哲学と歴史の中で神様が起こした愛の違いです。これは大きいですね。

■和敬清寂

これからお話する「和敬清寂」も仏教哲学で説明されるのですが、ぼくは高山右近がそうであったようにキリストの光に照らして「和敬清寂」を解説してみました。そうすると、結構分かり易いのです。

「和」は「調和」で英語でいうと「**Harmony**」です。皆さん修道が必要なのですが、ぼくの修道は嫌な奴とでも話す、嫌な奴とも飯を食う、嫌な奴とも自分からは付き合いを切らない、縁を繋ぐことです。まさに修道です。

「敬」は「尊敬、畏敬」であり「**Respect**」です。これも修行です。相手が誰であっても尊敬することです。これも修行です。イエス様の言葉では、「イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第1の戒めです。『あなたの隣人を自分のように愛せよ。』という第2の戒めもそれと同じようにたいせつです。」（マタイによる福音書 22 章 37～39 節）。自分を愛するように隣人を愛しましょう。

「清」で「清浄」で、英語では「**Purity**」です。庭や茶室、道具などはもちろんですが、身体の内側に清浄が宿っていなければなりません。聖書においても「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身もあらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい」（第一ペテロ 1 章 15 節）とあるように、ぼくたちがこの世界で清く生きるということは神の世界で生きることなのです。

「寂」は「静寂」であり「**Tranquility**」です。これは人間とは何物なんだということを創造者の前で意識する静けさですね。自らの無知無能を嫌っというほど知らされて、言いたいけれども黙って言わず、知っていても本当に知らないふりをして聴き入る。そういう心の静けさが「寂」です。

■自分らしい「一期一会」「和敬清寂」の心

「侘び茶」というのは、こうした「和敬清寂」を乾いて求めて、そして一服のお茶の中に静けさ、平和、自分らしさを取り戻し、ぼくが大切に修道していることは、自分自身を愛するということです。自分自身に一番美味しいお茶を点てさせていただいて、神様に感謝してスタートする一日にすることが修道ですね。ぼくはぼく自身が一番嫌な奴だということは分かっているのですが、神様が自分自身をもっと好きになれよと言っているのです。利休さんはそうしたことを教えたのだと思います。人の汚い嫌な所だけを見るのではなく、その人が大切にしている部分だったり、あの人はこういう人なんだと「カリスマ＝賜物」を受け止められるような訓練をすることが「侘び茶」を学ぶ者としての厳しい修行です。だからなるべく目立たないことが大切なのです。お家元の側近の凄さは、ぼくが今日は何かを盗んで帰ろうとして茶の湯に臨んでも、気が付くと終わってしまうのです。歌舞伎のような見せ場がないのですが、それでいて楽しかったと帰ってくるのです。「侘び茶」とは、自分を捨てて、お客様に命を注ぎこむくらいのサービス精神がおもてなしなのですね。それを務めるには「寂」というパワーがないと出てこないのです。ですから、15 代の楽さんが「ぼくは吸引力のある、磁力を持った作品を作りたい」というのは凄いことだと思います。ぜひ、作品を見てください。

冒頭に申し上げた「断捨離」は「侘び茶」の中でとても大切なことで、大老の井伊直弼が遺した『茶之湯一会集』で、その冒頭に「一期一会」という言葉があり、その「一期一会」と「和敬清寂」は対になって伝わってきています。ぼくたちは真似でなく自分らしい「一期一会」「和敬清寂」の心を身に付けなければ、嘘っぱちになっちゃうということなのです。それが、千利休の遺偈や高山右近の日本訣別の書状、利休さんたち多くの茶人たちから連綿と続いている「侘び茶」の精神として遺してきた「一期一会」や「和敬清寂」の境地に辿りつくことはできないのです。ぼくたちが本当に人間らしく、自分らしく生きられる道が「侘び茶」の中に表されているのです。「侘び茶」は何処までも信仰と同じ修道です。学び続けることが大切です。

凡庸な私にはなかなか修道の道を歩むことはできませんが、繰り返しお話を伺いその瞬間だけでも…。